

宍道低地帯の地形発達史に関する覚書

応用理学部門 渡邊 農

1. はじめに

平成 16 年 6 月に、秘蔵されていた絵図等を収録された図録集；三館合同企画『絵図でたどる島根の歴史』が刊行されたことにより、郷土史誌や古地理変遷図などで示されてきた幾つかの内容に誤りがあることが判明した。然るに、その後で刊行された郷土史等の諸資料において、池橋達雄氏による斐伊川寛永東流説への問題提起と拙論を除くと、その誤りを指摘されている公刊資料は見られないようである。これは A S P E が刊行している資料においても同様で、水資源・環境研究分科会の報告の中に“佐陀川開削説”と“斐伊川寛永東流説”も取り上げられている。

だが、そこに示されている前者の論は、明治 45 年に描かれたように思える“捏造図”を使用されているので、訂正されないまま放置されることは好ましくないであろう。このことより、島根県内務部による『島根県旧藩美蹟』に掲げられている図が「捏造であると判断した根拠」を示すと共に、宍道低地帯の西側に焦点を絞り、古絵図などを基にして推測される、疑問に思える場を取り上げ、参考としたい。

2. 斐伊川寛永東流説と佐陀川開削説

拙論は、島根県地学会会誌の第 22 号（2007 年 3 月発行）に「問題提起としての論」を掲載して貰っているから、重複した部分のある記述にはなるが、若干の補足を加えて置く。

なお、佐陀川開削説を“誤り”とした論は、鳥取県三朝町で 2006 年 8 月 18 日に開催された鳥取・島根両県技術士会の技術交流会の話題提供者に選んで頂けたことで『“洞ネタ”を基にホラの話語る』とした資料の中に加えてあるから承知されている方も居られるように思っているが、この論は第四紀地殻変動に関する権威高い方々が示されてきた説へクレームを付けることにあり、かつ時間の余裕が無かったから説明が不十分で理解されなかった可能性もある。

ともあれ、このことで地学会での発表は行なわないことにし、準備していたプレゼンテーション資料は使わないまま残してあるし、島根県地学会誌への投稿も行なわない積もりであったのであるが、2006 年 8 月に発行された島根大学附属図書館編の『絵図の世界―出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図―』を見ることで考え方を変えた。その理由は、佐陀川が描かれている正保 2 年図と元禄 15 年図を出雲部だけの部分図として掲げられ、佐陀川などの件を指摘されていないことにもあるが、それ以上に衝撃を受けたこととして「故・美多 実氏（1912―1995）が示されてきた論証などを全く無視されていること」にあった。それが学会誌には相応しくない記述である「出雲国の“風土”記に対する考察」の項を意図的に付け加えた理由である。これに関連した事柄は後で触れることにし、捏造と判断した根拠を示して置くと、次の点にある。

正保 2 年図（1645）と元禄 15 年図（1702）に対応させて眺めれば判と思うが、J R 松江駅を立地させる場に当たる“中洲”の姿が後者の形と同じであり、前者では未だ中洲の姿を描かれていないこと。そして、島根郡と秋鹿郡の郡界の表現が後者と同じで、前者とは異なっており、他期間の絵図においても異なったものが多いことである。これに加えて『出雲国風土記』に書かれている“佐太河”の項と“恵曇の浜”の項における記述を見れば、江戸期においても佐太神社の前で佐陀川に合流していた筈である多久川の位置を佐陀川樋門の辺りまで、北側に大きく寄せた描き方を採ることで捏造された河川名であろう、“沓川”と“忠太夫川”の間に示されている

空白部が“ 恵曇の陂 ”の位置に当たっていることも読み取れるように思っている。

美多氏は 1969 年刊行の『平田市誌』と 1972 年刊行の『斐川町史』の分担執筆された方とされており、島根県古代文化センターが 2001 年に古代文化叢書 7『風土記・斐伊川・大社』を遺稿集として刊行されているから、該当地の郷土史誌や斐伊川誌の類を編纂・執筆された方であれば承知されている筈に思えるのであるが、何故か、その関係者が書かれた図書に美多氏の論証、またお名前を出されることは無く、先駆的な指摘を無視されてきたことは不可解と思うからである。その代表的な図書を一つ挙げて置くと、2004 年に刊行された石塚尊俊著『出雲平野とその周辺』が該当するように思う。理由は、松江藩の藩儒であった桃好裕氏の著書；『出雲私史』に対し、美多氏が「藩の新田開発を目的とした新川開削の失政を隠すために幕末期の庶民の多くが抱いていた洪水への恐怖感を利用して書いた作文であり、洪水の記録に嘘が多く、資料としての価値無し」と酷評されているものを出雲の正史（⇒310 頁）と書かれ、高く評価された記述になっていること。そして、地形発達史の読み方に関しても疑問な点が幾つかあることによる。それらの事例は後で取り上げるが、いずれにせよ、これが判れば「佐陀川開削説の捏造が、何故、行なわれたか」についても“ 旧藩美蹟 ”とした著書名から、明らかであるように思える。

島根大学附属図書館編による『島根の国絵図―出雲・石見・隠岐―』が 2012 年に刊行された。出雲国絵図の解説は池橋達雄氏であり、そこに掲げられている“ 慶長出雲国絵図 ”と“ 寛永出雲国絵図 ”から、斐伊川の東流については永禄元年（1558）以前とする見解を示されており、このことは上記した 2006 年発行の『絵図の世界』の中にも示されている。

ちなみに、この両図は石塚氏の著書の 180 頁に部分図として掲載されており、これを承知されたうえで『出雲私史』の記述を高く評価され、寛永の洪水と東流の項（⇒176 頁）を書かれている。ともあれ、寛永期の東流説を“ 是 ”とした記述を成されてこられた方達には沖積地に対する地形発達史や河川の形成機構と変遷史などへの整合性を持った説明を行なって頂けることを要望したく思っている。

3. 江戸初期に神戸川の河道は移動したのか

池橋氏は、慶長出雲国絵図の解説の項（⇒23 頁）で「・・・次に、神戸川の流路についてであるが、古志の西を北上して大社湾に注いでいる。この川が、現在のように古志の東を北上するようになるのは、私は寛永期のことと考える。・・・」、そして補注欄の項（⇒61 頁）に「神戸川が近世初期にはこのように古志の西を北流していたことは、兵庫教育大学名誉教授で古志在住の成瀬敏郎氏から教示をいただいている」と書かれている。

ちなみに、成瀬氏の「出雲平野の地形分類図」は石塚氏の著書の 50～51 頁に掲載されているから、それを見ると、島根医大の西側辺りに浜山方向へ向かう、少し古そうな感じの旧河道は示されている。だが、そこよりも西側、また東側にも神戸川の川筋に該当しそうな旧河道は読み取れず、古志の西を北流していたとは考え難い。そればかりか“ 慶長図 ”で古志とされる位置は、どう眺めても現在の今市である。ここは出雲守護であった塩冶氏の支配地とされているが、塩冶氏は高貞の代において高師直に殺され、滅亡しているから、その後の出雲守護を佐々木氏一門である「古志氏系が継いでいたことによる」と解すれば済むことであるように思える。

なお、石塚氏の著書で江戸期の移動に関する記述は見当たらないが、54 頁の“ 神門川 ”の欄に「・・・しかしその川筋は今よりかなり南でした。それは後でものべるように、先年これこ

そ神門郡の跡に違いないと思われる遺跡が、いまの川筋より南に出たのですが、『風土記』通道の条には、東から来た正西道が“又西へ七里二十五歩にして神門郡家に至る。即ち河あり。渡り二十五歩、渡船一つあり”と、郡家を過ぎたところに川があるように記されているからです。遺跡は動きません。ですから、これにより川が郡家より南にあったと考えられるわけです。事実、地名や口碑などによる推察でも川はもっと南にあったと考えられています。・・・」

郡家の位置に関する記述部（⇒58～59 頁）の引用は行なわないが、古志橋の南、本郷の一角とされており、成瀬氏の地形分類図で該当しそうな旧河道が読めない。

出雲平野の地形分類図としては、大筋では同じであるが、より詳細な図を島根大学教育学部教授の林正久氏が作成され、建設省中国地方建設局出雲工事事務所が 1995 年刊行の『斐伊川誌』に示されている。この地形分類図には南側山沿いの旧河道が描かれているので、それが該当するとした見方もあるだろうが、林教授が書かれているように、神戸川左岸の地形面は“完新世段丘”と看做される場である。したがって、風土記時代の神戸川に該当する旧河道とは受け止め難く、弥生期後半頃、もしくは古墳時代前半頃までの河道跡と見るのが適切であるように思える。この推測の妥当性についてはともかく、『出雲国風土記』の記述は「神門川が郡家の南側にある」と書かれているのでは無く、巻末記“道度”の項で補足書きが加えられている“出雲河”と同じで、単に「斐伊川から西へ七里の場に渡り二十五歩の川があって、当時は古志橋が無かったから渡船が一つ置かれていた」と解すれば済むことであろう。

4. 神光寺川の開削に関する疑問点

神光寺川（堀川）の開削と菱根新田の開拓に関しては、地域史の対象として検討が成されてきた場であるから「疑問の余地無し」と考えられているのであろうか、疑問点や矛盾のあるものに対する説明の無い事柄が幾つか見られる。

なお、筆者が疑問としていることは単純であって、周辺地の他の領域と同様に 2.5 万分の 1 地形図で示されている標高 5m の等高線（補助線）よりも低い範囲を着色して眺めると、乙見山丘陵の切断とされている狭隘部を含めて神光寺川沿いには、かなり幅広い低地の領域が現れるのであるが、上記した地形分類図では砂州とか、砂原などの表現を採られており、ここをどう判断されているのかを推測し難いし、石塚氏が近世初頭頃の姿として記述されていることにも疑問を感じる点がある。その一つが、高浜川と古内藤川を合流させた河川の流れ行く方向で判るように、切断とされた場で最も低くなっている理由（凹地の形成機構）が理解できないことにある。

菱根新田の開拓と神光寺川（堀川）の施工については石塚氏の著書に詳しいので、詳細は同書を参照願うことにし、部分的な抜書きを行なって疑問としていることの説明を加える。

石塚氏は“三木由緒書”を基に、浜山の北端鍵ヶ崎から大社町の堀川に向かい、海に落とす排水溝を元和二年（1616）に着工して掘り貫かれ、その跡が古川と呼ばれていること。明治初年の「修理免村井出川敷図面」にも載っていることなどを示され、寛永十年（1633）の大洪水のため埋没したことを書かれている。このことは池橋氏も『島根の国絵図』の寛永出雲国絵図の解説部（⇒26～27 頁）に示されており、寛永十年の洪水で「鍵ヶ崎堀貫川」が埋没したというのは事実で・・・とされているが、その根拠は小山町郷土史研究会編（1992）；『出雲平野の開拓―三木与兵衛の偉業―』にあるらしい。この資料は見えていないので、誤りがある可能性も無くはないが、いずれにせよ、両者共に掘り貫かれた場がどこで、どんな規模のものであったかを示

されておらず、2.5 万分の 1 地形図に示された単点の標高で 6m とある砂原に排水溝を設けて、道路高の標高が 2m と示されている地区の田面を乾陸化させるためには、飲み口と吐き口の底面高や排水可能な水路幅の設定などの面で考えられることに加え、排水溝跡地の形跡を残していない実態からしても無理筋のある判断であることは技術者であれば容易に判ることであろう、と思っているので簡略化した説明にとどめるが、この排水溝（古川）の水を「堀川へ落とす」とされている（同書 201 頁の図、参照）こと自体が不可解である。何故ならば、この段階では「乙見山丘陵の切断が行なわれていないことになっている」からである。これらが関係しているのだろうか、『斐伊川誌』では次のような記述をなされて、更に訳を判らなくさせている。

「……。元和 2 年（1616）、藩は三木与兵衛に命じ、鎗ヶ崎において乙見山を切り開いて神光寺川（現在の堀川）を開削する川普請に着手した。この工事は元和年中（1623 年まで）には完成し、これにより菱根池の吸いは神光寺川を通して大杜湾に排出され、干拓は容易になった。寛永 15 年（1638）の三木由緒書によると……。以下、省略」

石塚氏の著書に戻すと、寛永十五年寅八月とある進上書が、進上先の藩ではなく、三木家のものであることも不審ではあるが、その件はともかく「与兵衛の子、加兵衛の話」として書かれている資料の中に、藩の許可を得られて「切貫の普請が始まったのは寛永十七年辰春」とある。つまり、『斐伊川誌』の受け止められ方と辻褄が合わないように思えるのではあるが、それは問わないことにし、三館合同企画『絵図でたどる島根の歴史』の中に、問題提起した場に疑問のあることを伺わせる絵図が掲げられている。



42. 杵築大社近郷絵図

『絵図でたどる島根の歴史』の 34 頁から引用

判り易くするため、少し拡大してあるが、この慶長十四年（1609）御造営の図に神光寺川が描かれていること、そして右端の上流部は瓢箪状の膨らみを成していることにも留意頂きたい。

ちなみに、この図は石塚氏の著書でも 145 頁に掲げられているのであるが、それはともかく、図の解説は島根県立博物館主任学芸員の岡宏三氏が担当され、上記したことが関係しているのであろうか、神光寺川と橋が描かれていることには触れておられず、「・・・出雲大社には、慶長造営の本殿内部の障壁画を模写した“三月会神事図屏風”が伝来し、そこに描かれた風景の範囲が本図とほぼ一致することが注目される。・・・」とだけ書かれている。

なお、同書 8 頁にカラー版の“天保杵築惣絵図”が示されており、水溜まりであった場の排水が進んで新田に変わった姿を描かれている。カラー図の引用は行なわないが、水色で彩色された場が低湿地域との重なりを有すること、そして切断されたとされている場の下流域に当たる川沿いにおいても水色で彩色されていることを確認頂きたいが、上流側に描かれている膨らみを持った川の姿については、寛永 10 年（1633）に作成された“寛永出雲国絵図”や 1645 年に作成された“正保出雲隠岐国絵図”の表現と共通性を持っていることも併せて確認頂ければと思う。

ところで、三木家由緒書にある寛永 15 年とは、どういう年であったのであろうか。堀尾氏は寛永 10 年に忠晴が没して断絶、翌 11 年にかけて一時幕府に収公されている。寛永 11 年 8 月、若狭敦賀から京極忠高が松江城に入るが、寛永 14 年の忠高の死によって断絶し、幕府に収公され、寛永 15 年 4 月に信濃松本から松平直政が入部している。進上書の宛先である乙部九郎兵衛とは松平家代々御家老の筆頭であろうと思われるが、そこへ 8 月に提出した、とされている。

お家断絶で「御家来衆がどうなっていくのか」の具体像は知らないのであるが、現在の首長さんの交代と違うことぐらいは判る。上級職の方達だけで無く、役職者は総入れ替えに成ったであろう。リストラされた中で地元雇用の手伝い人に当たる階層や責任が軽かった下っ端の武士には再雇用も有り得たかも知れないが、いずれにしても地域の実情などを全く知らない方達だけの組織である。そこへ前任のお殿様からは「御褒美も頂戴していますよ」などとした進上書を提出しているのであるから、何か裏がありそうだと受け止めるのは穿ち過ぎであらうか。その件はともかく、『斐伊川誌』の 145 頁に示された「風土記時代の出雲平野の古地理図」を見ると、江戸期まで池沼を残していた低い地形場の菱根地区や荒木浜を低湿地とされ、そこよりも高い領域に広げた範囲を神門水海とされている。これは“佐陀川開削説”を支持されることで描かれている場の表現と同様に、乙見山の“切断説”を支持されていることにある、と推測している。

少しだけ余計ごとを付け加えて置くと、海に近いとはいえ、熊野大社からは遠くて辺鄙そうな奥まった場に出雲大社を立地させている理由が判らなかったのである。が、神光寺川沿いに湖面が存在していたことを想定し、当時の交通や運搬の手段が舟にあったことを勘案すると、交易や移動手段などの面で最良の場が選ばれているように“妄想”され、興味深く思っている。

5. 段丘と地層の対比に関する諸問題

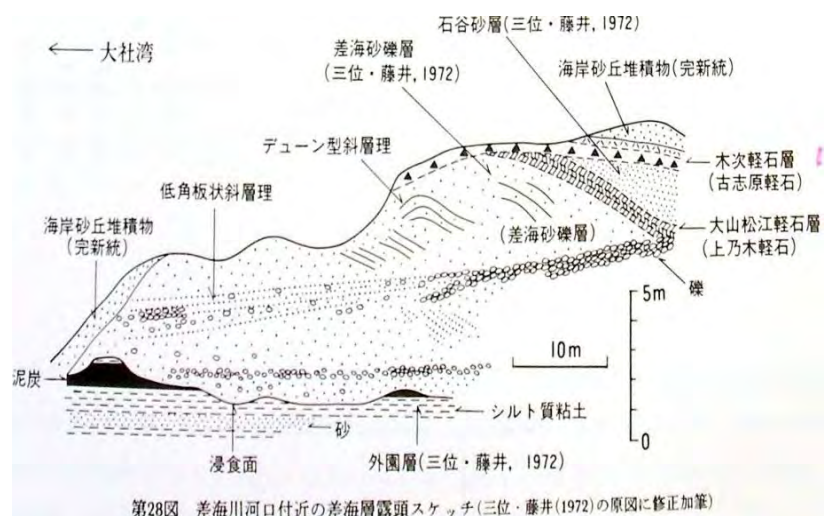
第四紀地殻変動と地形発達史の姿を追い求めるうえで重要な“鍵”の一つが段丘である。宍道低地帯の段丘に関しては 1994 年に地質調査所刊行の『松江地域の地質』で総括されており、それに対する批判を含めた拙論は別資料に書いているので重複しないようにするが、公刊した資料の中に示していた「宍道低地帯に対する地殻変動の認識に誤りがある」ので、訂正して置く。

訂正を必要とするのは、島根県地学会会誌、第 26 号の中に書いた「宍道低地帯は沈降域」と

した箇所である。権威筋に当たる方達が示されてきた“学説”では、そう書かれているのではあるが、各段丘の地形面高の実態から、平均隆起速度を $0.1\sim0.15\text{m/Ka}$ ($\Rightarrow$ 千年) で評価すべき領域であること、つまり「沈降域」を「隆起域」に訂正させて貰う。この訂正で推察頂けているように思うが、私が抱えている“段丘観”は、学術分野に属されて権威者と看做されている多くの方達の段丘観とは大きな違いがある。具体的には、権威筋の方達が“河成段丘”とされてきた場の多くが「海成段丘である」と考えていることであるし、これまで無視されてきた感のある対象、例えば斜面中腹部などの場で見られる“巨岩塊混じり堆積物”の多くを段丘相当層と看做す考え方である。そして高原地域などの標高が高い場に見られる段丘を河床との比高で判断され、低位・中位・高位とされた段丘の区分は、例えば都野津層を分布させて開析を受けた場の旧・邑智町別府地区などで低位とされる段丘堆積物のように、誤った認識を与える可能性があるから適切で無く、また段丘面を覆う火山灰層（テフラ）の年代で下盤を形成している層の時代を判断されることは適切さを欠く、などとした考え方である。公表を予定していない資料ではあるが、ここに示してある記述に重複することであるから、これで置き、次に示す事柄も重複するのではあるが、宍道低地帯における地層の対比や地質構造の解析に重要なことであるし、そればかりか学術分野の方達からの訂正が無いようで、P Eである方達の中にも誤りに気付かれていないのか、その層序図などを引用した対比による記述の事例を見るので、取り上げて置く。

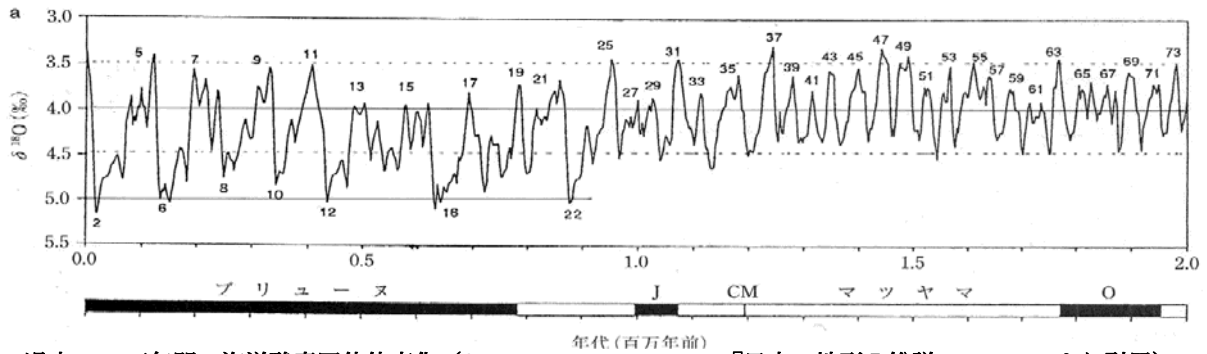
対象とするのは、地質調査所 1989 年刊行の『大社地域の地質』の中で再定義されている“差海層”である。判り易くするため、同書に示されている露頭スケッチの図を引用させて貰う。

詳細は同書を参照願うこととして簡略化した記述にとどめるが、木次軽石層（古志原軽石）は東京大学出版会から 2003 年に刊行された『新編火山灰アトラス』の中において広域テフラの一つとされる三瓶木次テフラ；SK である。再定義された頃に推定されていた年代は約 7—8 万年前頃であったが、10.5—11 万年前の間に改め



られている。そして、大山松江軽石層（上乃木軽石）；DMP は 11—12 万年前頃と考えられていたが、13 万年前よりも古く、リス氷期の期間中とする見解も示されている。したがって、海洋酸素同位体ステージ（注；MIS と略記される）で 5e、言い換えると 12.5 万年前頃をピークとする高海水準期に形成された地層が差海層である筈は無く、図の「石谷砂層が該当すること」は明らかであろうし、差海層と外圍層は、その前のステージに当たる海成層であるから、外圍層の浸食面の形成期を含めて MIS-7 の期間内に対比されることになる。

専門分野が異なる方達には判りづらい面もあろうから、理解が容易になるように、各ステージの海水準変動の状況を推測されている図の中で、 ^{18}O 濃度変化による古・海水温の標準として採用されてきたシャックルトンの図（Shackleton, N. J. 1995）を掲げて置く。



過去 200 万年間の海洋酸素同位体変化 (Shackleton, N. J. 1995. 『日本の地形 I 総説』の P.121 より引用)

承知されている方も多いと思うが、少しだけ補足した説明を加える。図中の番号は、エミリアニのステージ番号を継承されたもので、これは変えられず、偶数を氷期、奇数を間氷期、そして新たな成果が得られた場合には各ステージ間のサブステージで示される決まりになっており、小数点を入れて 7.1, 7.2, 7.3, . . . とした番号が打たれるが、混乱を防ぐため MIS-5 の期間にのみ、最初に使用されていた「a, b, c, d, e の補助記号」で書かれることが多い。

各ピーク高や年代を示す位置については、新たな成果が得られた場合には修正・補正が行なわれているし、古・海面高は地形・地質に表れている実態との突合せで行なわれるものであるから、ピーク高と年代の位置だけを基に、単純な決め方を成されるものではない。

宍道低地帯に分布を見る段丘の MIS との対比は『松江地域の地質』の 79 頁に示されており、関東南部での海水準変動 (町田, 1975) の結果が使用されている。そこで推定されていた古・海面高は、町田, 2008 の論文で大きく書き換えられているので、地形面高の実態などから見直しを必要とするように思っている。そのことはともかく、弓浜地区や中海の湖底下面に覆没し、MIS-5e に対比される海成層を弓ヶ浜層と命名されたのであるから、DMP に覆われていることで定義された安来層との関係 (上・下) が逆であることは明らかで、訂正される必要がある。

だが、学術分野の方達がそれを行なわれることは無く、そればかりか中海の湖底下には「弓ヶ浜層は存在しない」とされた、戯画的な図を日本地質学会の刊行物 (日本地質学会第 107 年学術大会、見学旅行案内書) などの中に示されているのであるから、哑然とするほかはない。

ともあれ、“ボタンの掛け違い”の元は弓ヶ浜層を外園層に対比されたことにもあろうから、該当地域での対比や地質解析は見直しを必要とするように思っている。

6. 縄文海進最盛期の海域と浜山の形成についての疑問

海面高が現在よりも高かった 6,000-5,000 年前頃 (縄文海進最盛期) における宍道低地帯の古地理図は風土記時代の古地理図などと共に、古地理変遷図として数名の方達が示されている。それらの全てを承知している訳では無いが、縄文海進最盛期の海面高は 1m 程度であり、2m を越すことは無い、とされている方達が宍道湾と美保湾の間に幅広い海域を描かれているのは論理が一貫していないように思えて理解し難いし、同様に、姿を少しだけ変えられ、かつ年代を僅かに変えた記述の描き方で幾つもの図を示される方達の古地理図は、どれを信頼して良いのか、の判断がつかないから対象にしないが、林正久教授の図は論理が一貫しており、学ばされる点も多く、高く評価しているので、これに対する疑問に思えることを 4 点だけ取り上げる。

一つは、浜山の下盤に関する考え方である。林教授の論は、沖積層と判断されている下盤の礫層に、約 2.6-2.9 万年前に噴出した始良 Tn テフラ (AT) が検出されたことにあることは判る。

だが、周辺地に見られるボーリング柱状図で示されている粘性土の物性から、それを AT と決め付けて良いのか、という疑問であり、三瓶起源の年代に関しても同様である。

二つ目は、浜山の形成機構についての疑問である。水深が最も深くなる環境場の近傍に、それも浅くなっている場を避けた形の砂溜まりを形成し、海面の上昇に追従しつつも砂山の形成を先行させるように高めて行き、標高 40m まで山盛りにさせた場の形成機構の説明が無いから、理解し得ないことにある。浜山が「新砂丘だけで構成されている」と考えられていることは、他の資料に共通することではあるが、新砂丘領域の厚さと下盤の考え方には違いがあり、洪積層地盤の高まりがあった場とすれば、少しは理解を容易にさせてくれるように思うからである。

三つ目は、縄文海進最盛期の海面高の件で、現在よりも 3~4m 高い場にあったとし、その根拠も示されている。私も標高 5m で近似させるのが適切と考えていたのではあるが、上流からの顕著な吐き出しによる堆積場を除くと、縄文海進最盛期の海域を標高 10m の等高線で縁取りされる山際線に求めるのが低地の形態と良く調和し、中でも砂山である浜山の東側斜面の末端に顕著な変換点が現れ、前縁に広い砂原を形成させていることである。それに加え、この領域を隆起域と考えているから、10m に近い高さに求めるのが適切ではないのか、と思うようになった。その理由の一つに、弥生末期からの寒冷期が終息し、温暖期に当たる平安期に向かう途時で、現在の海面高に近い状態にあった、と推測される風土記時代の“神門水海”の範囲を標高 3m 付近に求めるのが適切に思えることにもある。現在の地形面高は、後の堆積厚が加算されたものであるから、それを差し引いて判断すべきことは当然であるが、これは縄文海進最盛期についても同じであり、近世の前頃から人為の影響が甚だしくなっているように推測しているからである。

四つ目は、堆積速度（堆積厚）に関する疑問である。鉄穴流しの影響で天井川化している斐伊川河床部の辺りでは、弥生期の遺跡が海拔 7m 付近に見られることを示されている。JR 斐伊川橋梁の橋脚がある場の河床高で代表させると 12m 前後であるから、被覆厚は 5m であるが、これには近世の人為が関係している。そこで人為の影響が軽微であった場、例えば矢野町などを見ると、被覆厚はもっと薄いことが判る。弥生期といっても年代は判らないので、仮に 2,000 年前で考えて置くことにする。そして、ボーリング結果で示されている三瓶大平山火砕流（SOh）や鬼界赤ホヤ火山灰（K-Ah）の覆没深度を見ると、場所によっては非常に厚い被覆、それも堆積速度（堆積厚）としては砂よりも遅いように思える粘土・粘性土の被覆が、人為が関係した砂堆の領域よりも遥かに厚い場も示されている。SOh は 3,600 年前頃の噴火、K-Ah は約 7,300 年前頃の噴火とされている。何か矛盾のありそうなことを感じられないであろうか。

ちなみに、斐伊川よりも規模が大きく、排出させている土砂量が多い淀川の河口付近に当たる湾岸付近や大和川も流れ込んでいた河内湖跡などでの沖積層の厚さは、概ね 40m よりも薄いことが示されている。

7. おわりに

島大地質の関係者から見ると、拙論は異端性の強いものであるから、考慮頂けることは無いのであるが、それでもごく少数の若い方から「三朝で聞いた件に関心を持っている」と話し掛けて貰えることがある。P Eの方達が多く参画されている刊行物を眺めると、筆者の地質観と大きな違いがあることは明らかと思うので、余計なことは書かないで置くが、いにしえ（古）は稀であった、とされている齢を向かえることで一つの区切りとすべく、投稿させて貰うことにした。